

参考文献

- 『自解 100 歌選 大西民子集』
大西民子/著 牧羊社 1986 年
- 『回想の大西民子』
北沢郁子/著 砂子屋書房 1997 年
- 『評伝 大西民子』
有本俱子/著 短歌研究社 2000 年
- 『まぼろしは見えなかった』
さいたま市立大宮図書館/編 さいたま市教育委員会 2007 年
- 『歌人たちの昭和－遼空・文明を中心に』
沢口芙美/著 柘書房 2018 年
- 「短歌研究」1973 年 6 月号
短歌研究社
- 「短歌」1982 年 4 月号
角川書店
- 「短歌現代」1983 年 8 月号
短歌新聞社
- 「波濤」1995 年 2 月号(大西民子追悼号)
波濤短歌会事務局
- 「現代短歌」2014 年 2 月号
現代短歌社
- 「波濤」2018 年 10 号
波濤短歌会事務局
- 「波濤」2019 年 8 月号
波濤短歌会事務局

2020.9.7 発行

さいたま市立大宮図書館

さいたま市大宮区吉敷町 1-124-1

電話 048-643-3701

企画展 民子の日常

展示期間:2020 年 9 月 7 日(月)～11 月 6 日(金)

1	原稿「餅草も 摘みて待つとふ 母の手紙 給料日すぎて 帰らむと思ふ」
2	原稿「純白の 大根をきざみ まみどりの 葉を刻み休みの 日をわが遊ぶ」
3	原稿「あたためし ミルクがあまし いづくにか 最後の朝餉 食む人もみむ」
4	原稿「針袖子を 椀に浮かして なす夕餉 何を食べても ひもじきわれか」
5	民子がつけていた家計簿
6	民子で使用していたと思われる裁縫箱
7	原稿「春めきて ゆく朝々に 着惑ひて 変わりばえせぬ 服ばかり持つ」
8	原稿「もの縫ひて 二階にあれば さまざまの 地上の音の われに集まる」
9	原稿「洋裁のこと」
10	原稿「すぐ乾く ブラウスと知る やさしさに 泡だてて揉む 胸の部分を」
11	色紙「帰らむと いふをふたたび 坐らしむ 容易にやまぬ 雨と知りつつ」
12	原稿「帰り来て もの言ふとせぬ われを措き 光るまでタイルを 磨く妹」
13	原稿「ビニールの 袋をたたみて かさねつつ 次第にやさしき 曇り帯びゆく」
14	原稿「歌人日乗」
15	レコード「ショパン 夜想曲全集」1、2

民子の日常

別れた夫への激しい心情を歌に詠んだ民子ですが、ありふれた日々の中に題材を求めた歌も多く、民子の作風の一面をよく表しています。

✿料理や、食事について詠んだうた

純白の 大根をきぎみ まみどりの 葉を刻み休みの 日をわが遊ぶ
あたためし ミルクがあまし いづくにか 最後の朝餉 ^は食む人もあむ

仕事と歌人としての活動で忙しかった民子は、ゆっくりと料理に専念する時間は持てなかったようです。その代わり、妹の佐代子が家事を取り仕切り民子を手助けしてくれていました。

それでも時間がある時には料理する日もあったのか、料理を楽しんでいる様子を描いた歌や、食事から題材を取った歌を詠んでいます。

また、夫と共に住んでいた1950(昭和25)年の家計簿には詳細な買い物記録がつけられており、戦後すぐの頃の不安定な時代で、家計を切り盛りする民子の日々を想像させます。

✿裁縫や服を詠んだうた

春めきて ゆく朝々に ^{きまど}着惑ひて 変わりばえせぬ 服ばかり持つ
もの縫ひて 二階にあれば さまざまの 地上の音の われに集まる

民子は家事の中でも一番裁縫が好きで、晩年体調不良になるまでは自分で服を作ることが多かったようです。そのためか、しばしば裁縫や服をテーマにした歌を詠んでいます。

民子は、洋裁ができるのは女学時代学校の先生が型紙の取り方を上手に教えてくれたおかげで、縫物をしていると気が休まることもあって、

自分の服は自分で作るようになっていたと言っています。

✿我が家を詠んだうた

帰らむと いふをふたたび 坐らしむ 容易にやまぬ 雨と知りつつ
帰り来て もの言ふとせぬ われを措き ^お光るまでタイルを 磨く妹

民子は、大宮に来てから職場の文化会館の宿舎や、岩槻の浄国寺の宿坊跡を間借りして住んでいましたが、1968(昭和43)年に、大宮の建売住宅を購入して、妹と2人で暮らしていました。今回展示している作品にも、自宅での日々を題材にとった歌があります。

民子は旅行を好まず、歌に関する以外で外出することがあまりなかったため、自宅での日常生活も民子にとっては重要な歌の題材になったようです。



©仲佳